

農業共済新聞 千葉版

掲載号	4 月 4 週号	
筆者	所属	農林総合研究センター
	職名及び氏名	主席研究員 草川 知行
題名	トマト 栽培後の茎葉処理	
備考	【図説明】トマト残渣を施用したトマトの収穫終了時における根腐萎凋病の発病程度	

【本文】収穫が終わったトマトの茎葉(以下、「トマト残さ」と呼ぶ)を堆肥として利用すると、前作のトマトに生じた病害が次作に持ち越される心配があり、これまでトマト栽培圃場への施用は行われませんでした。しかし、適正に処理すれば有機物として有効利用が可能です。

トマト残さの簡易な処理技術として、ポリエチレンの袋に密閉する方法を開発しました。収穫の終わったトマトは、ハウス内で茎を地際で切断し、水分を70%程度に乾燥させます。乾燥に要する日数は、夏場で3日から5日、冬場で10日から14日程度で、葉が乾燥しカサカサになった頃が目安です。わら切りカッターを用いて、茎葉を細断し、大きなポリエチレン袋に密封します。なるべく空気が入らないように詰め込むのがコツで、口を固く縛ります。入手容易なもみ殻用のポリエチレン袋(0.07mm厚)の場合、詰め込みすぎると運搬の際に破けやすくなるので、30kg以下を目安とします。破けないように袋を二重にすると良いです。ポリエチレン袋の中でトマトの茎葉は酸素のない状態となって乳酸発酵しますが、このことでトマト萎凋病の病原菌を減らすことができます。乾燥処理したトマト残さの施用量は、2t/10a程度が適当ですが、9段摘心のトマトの場合、10a当たりの量は1.6tぐらいになります。施用後は直ちに耕耘します。この処理をしたトマト残さを連用してもトマトの生育収量には影響はありません。土壤消毒をしないで3年連続同じハウスに施用しましたが、萎凋病の発病程度は無施用と同程度でした。

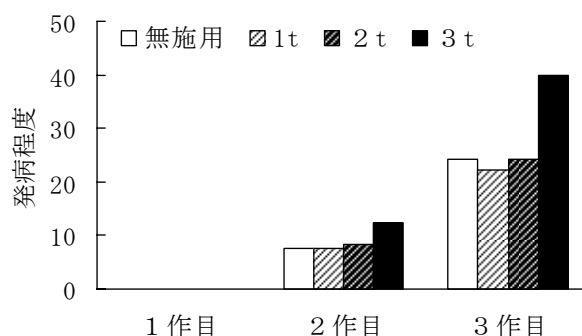


図 トマト残さを施用したトマトの収穫終了時における根腐萎凋病の発病程度